

生化学若い研究者の会「第59回生命科学夏の学校」開催報告

木村 有希¹, 田中 美樹²

(¹第59回生命科学夏の学校実行委員長 北海道大学, ²事務局長 広島大学)

「生化学若い研究者の会」は、日本生化学会後援のもと、生命科学分野の研究に携わる大学院生を中心に構成されています。北海道から九州までの八つの地域でシンポジウムやセミナー等を開催する「支部活動」、ライフサイエンス誌へのコラム掲載等のアウトリーチ活動を行う「キュベット委員会」、そして年に一度の滞在型研究交流会である「生命科学夏の学校（夏の学校）」の三つの活動を行っています。

今年は8月30日から9月1日までの3日間、定山溪ビューホテル（北海道札幌市）にて、「第59回生命科学夏の学校」を開催しました。夏の学校の北海道開催は、第59回が初となります。幅広い研究分野・年齢層の参加者が、全国各地から115名（うち講師9名）が集まりました。

「第59回生命科学夏の学校」企画趣旨

本年度の夏の学校のテーマは「飛び立てば道は広がる。この夏で何かが変わる。」としました。夏の学校は、各分野の第一線で活躍されている研究者を招いた講演会、多様な背景を持つ若手研究者との交流・議論といった、普段の研究生活では得難い経験の宝庫です。夏の学校を通じて、参加者の研究活動に新たな広がり・つながりを持たせたい、夏の学校の前後で研究活動に変化をもたらすきっかけとしたい、という願いをテーマに込め、本年度の夏の学校を開催しました。

ワークショップ

ワークショップでは、6名の先生をお招きして講演していただきました。相分離生物学やビッグデータといった近年ホットな分野に加えて、睡眠やアストロバイオロジーといった多くの参加者が日頃触れる機会の少ないテーマ、若手研究者の悩みの一つであるキャリアパス等、多様なワークショップを企画しました。講演終了後も講師のもとに参加者が集まり議論している様子も見られ、非常に有意義な時間となりました。

シンポジウム

近年、新しい研究領域の創出や革新的な技術開発を目的とした融合研究が盛んに行われています。しかしながら、若手研究者が直接参画する機会は多くありません。今回のシンポジウムは、講演を通して融合研究の重要性を認識し、実際に参加者同士で融合研究を考案するプロセスを体験することで、今後融合研究を展開する一助とすることを目的としました。

第一部では、融合研究に関わる3名の先生方にご講演い

ただきました。実際の融合研究の実例そのものは勿論のこと、融合研究プロジェクト運営の経験談もお話ししていただきました。なぜ融合研究が必要とされるのか、その実際はどのようなものなのか、示唆を得られるご講演でした。

第二部では、「生活を良くする融合研究を立案しよう！」をテーマとして、多様な背景を持つ参加者同士でグループワーク形式の議論を行いました。既存の概念や参加者の専門技術を上手く組み合わせた融合研究を考案した班や、斬新な着眼点から研究アイデアを提案した班もありました。先生方からのフィードバックでは、本質をついた指摘を受け、思いもしない側面に気づく班もありました。

第一部と第二部を通じ、参加者が融合研究の重要性を認識し、その難しさと楽しさを体験できたようでした。

研究交流企画

先生方の講演だけでなく、若手研究者同士で交流を深められる企画も夏の学校の魅力の一つです。本年度は、研究交流企画として、「研究交流会」「ポスターセッション」「自由集会」の三つの企画を用意しました。

「研究交流会」では、初対面の参加者と話すきっかけ作りのために、互いの研究内容や趣味等を紹介し合う場を提供しました。最初は緊張していた参加者も見受けられましたが、すぐに打ち解けて白熱した議論が展開されました。

「ポスターセッション」では、様々なバックグラウンドの参加者による研究発表が行われ、研究交流会よりも踏み込んだ活発な意見交換がなされました。普段とは異なる視点からの意見・アドバイスを得て、今度の研究のヒントを得た参加者も多いようでした。



(写真1：ワークショップ)



(写真2: シンポジウム)



(写真3: ポスターセッション)



(写真4: 集合写真)

「自由集会」では、参加者が日頃気になっているトピックをトークテーマとして、グループに分かれて討論・交流を行いました。幅広くユニークなテーマのもと熱く語り合うことで、参加者同士のつながりも深まったようでした。

夏の学校から広がるもの

「生命科学夏の学校」には、“生命科学”に興味を持つ若手研究者が集います。生命科学は非常に広い分野を包含しており、参加者や講演者の専門分野は多岐に渡ります。夏の学校の企画を通じて、普段の研究生活のみでは触れる機会の少ない話題に向き合うことは、参加者の視野や可能性の広がりにつながります。更に本年は本研究会の発足以来初の北海道開催であり、例年新規参加者の少ない地域からの人材を呼び込み、これまでにない新たなネットワークの広がりも狙いました。

今回の夏の学校を通じて、生命科学研究の発展につながる多くのきっかけ、会期後も続く若手研究者同士のつながりを提供できたと考えています。来年の「第60回生命科学夏の学校」は、“beyond”をキャッチコピーに掲げ、既に準備を始めています。夏の学校で広がったつながりを、研究活動、支部活動、キュベツ委員会活動を通じて更に深め、節目を迎える夏の学校が盛大に開催されることを期待しています。

最後になりましたが、本年度の夏の学校の開催にあたり多大なご支援を賜りました、日本生化学会をはじめとする法人・企業の皆さま、ご講演いただきました先生方に心より御礼申し上げます。

(生化学若い研究者の会・
第59回生命科学夏の学校についてはこちら：
<http://www.seikawakate.org>)